

杨玲 著

日本語授受動詞の 構文と意味

—— 日语授受动词句结构意义研究 ——

日本语言·文化·传播丛书
北京日本学研究中心学术专著丛书

中国传媒大学出版社



图书在版编目 (CIP) 数据

日本語授受動詞の構文と意味: 日语授受动词句结构意义研究 / 杨玲著. —北京: 中国传媒大学出版社, 2008. 5

(日本语言·文化·传播丛书)

ISBN 978 - 7 - 81127 - 268 - 0

I. 日… II. 杨… III. 日语—句法—研究 IV. H364.3

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2008) 第 060595 号

日本語授受動詞の構文と意味——日语授受动词句结构意义研究

著 者 杨 玲

责任编辑 冬 妮

责任印制 曹 辉

封面设计 大鵬工作室

出版监制 闵惠泉

出 版 人 蔡 翔

出版发行 中国传媒大学出版社 (原北京广播学院出版社)

北京市朝阳区定福庄东街 1 号 邮编 100024

电话: 86 - 10 - 65450532 65450528 传真: 65779405

<http://www.cucp.com.cn>

经 销 新华书店总店北京发行所

印 刷 北京市后沙峪印刷厂

开 本 850 × 1168mm 1/32

印 张 11.125

版 次 2008 年 6 月第 1 版 2008 年 6 月第 1 次印刷

书 号 ISBN 978 - 7 - 81127 - 268 - 0/K · 268 定 价: 32.00 元

版权所有

翻印必究

印装错误

负责调换

序 一

日语与其他语言相比，有着许多相通之处，也有着不少独自的特点。无论对于日语母语者还是对于非日语母语者来说，要想真正了解日语的特性，最基本的方法就是通过两国语言的对比研究。近年来，我国日语学界出现了一些基于语言对比背景的高水平研究成果，而且多来自博士论文级别的研究课题，本书所展示的就是其优秀成果之一。

“日语授受动词句”是颇具日语特点的句法研究难点之一，也是非日语母语者难以习得的一种日语表现形式。本书著者积多年日语教学和日汉语言对比研究的实践经验，从汉语母语者的视角出发，尝试对这一课题进行综合的、系统的研究，其主要攻关目标为：

1. 日语与汉语的授受动词句在句法结构和意义上有着一定的对应性，与其相关的日语语言要素有哪些？
2. 日语与汉语的授受动词句在句法结构和意义上并非一对一的对应，从日语方面看，其根本原因是什么？

围绕上述课题，著者运用日本著名语法学者益冈隆志的“动态句法论”（「動的構文論」）学说，通过审视以往对日语授受动词句的研究，指出了以往研究的问题在于，无论是关于授受动词句三个句式间的意义差异，还是关于授受动词句的“恩惠义”的研究，都只反映了授受动词句意义的一个侧面，它并没有反映出独立动词句和补助动词句间从结构到意义的关联性和连续性，所以也就不能本质地、全面地、系统地反映出授受动词句的意义。

著者认为，在分析日语授受动词句三个句式之间结构和意义上的“外在关联”（「外的関連」）以前，首先必须弄清楚授受动词句所具有的“内在关联”（「内的関連」），即独立动词句和补助动词句之间从结构到意义上的关联性。为探求这一“内在关联”，著者把授受动词句的意义范畴分为“物授与”（「モノの授受」）与“非物授与”（「非モノの授受」）两个下位类型进行分析考察。这一研

究方法的优势在于可以从结构和意义两方面连续地、关联地对授受动词句进行分析描述，它不仅弥补了传统研究中把独立动词句和补助动词句割裂的局限性，同时也弥补了以往在授受动词句意义研究上缺乏系统性的不足。

本书还着重强调了语言类型学中授受动词句的泛语言共性，即授受动词句最根本的意义特征在于“物的移动(モノの移動)”，并且把它称之为“对象使役性移动(对象使役移動)”。立足于授受动词句的这一泛语言共性，著者认为，一直以来备受关注的“说话人中心性(話し手中心性)”、“说话人视点(話し手の視点)”以及“视点(視点)”等体现日语授受动词句意义特性的要素，其内在本质反映的是以“说话人”的视点为中心的“物的移动”的方向性，著者把它分为两个不同的方向性，即“说话人指向性(話し手指向性)”和“说话人背向性(話し手離反性)”，并以此对日语授受动词句进行分析，展开深入细致的考察，提出了新的见解。

通过日语授受动词句这一课题的研究，本书向我们展示了下列重要的研究思路 and 方向：要探明一种语言的某一语法特性，须具有对各种语言共性和个性的宏观认识，同时也须具有对该语言的语法现象的微观分析。应该以此为目标选定研究课题，设计研究方针，运用研究方法，寻求研究突破。语法研究要重视具体的语法现象，从结构、语义及语用等多层面，探索语法要素的关联性和语法化的连续性。应该以此为基础抓住语言的本质，全面地观察语言，开展系统的研究。

这部专著是著者刻苦学习和努力实践的结果。2003年著者作为北京第二外国语学院的一名优秀教师考入北京外国语大学日语语言学博士课程，此后经过两年孜孜不倦的寒窗苦读和一年远离家人的异国研修，在北京日本学研究中心的关怀和中日双方指导教师的帮助下，一步一个脚印渡过了许许多多的难关和困境，终于完成了博士论文，并顺利通过答辩获得博士学位。更为可喜的是，她并没有就此止步，而是在此基础上以授受动词句的汉日对比研究作为新的课题，又考入了黑龙江大学外国语言学博士后科

研流动站，正在向着更高的目标继续攀登和努力。

此次本书作为“北京日本学研究中心学术专著丛书”出版，不仅可以为日本学研究中心增加新的研究成果，我们相信它也一定会为国内的日语研究、汉日语言对比研究作出贡献。

同时我们也期待通过本专著的出版，可以使从事日语教育和日语研究的同行们从中获得裨益，也能够使著者本人得到更多的专家指教和信息反馈，为新的努力目标奠定坚实的基础。

北京日本学研究中心副主任
北京外国语大学教授、博士生导师

曹大峰

2008年5月于北京

序 二

2006年に提出され学位を得た、楊玲氏の博士論文「日本語授受動詞の構文と意味」がこの度中国で出版の運びとなったことを心からお祝い申し上げたい。進展の著しい現代言語学の成果を十分踏まえ、うえて深い考察を行っている本書が世に出されたことを誠に喜ばしく思う。

本書は、書名が示すとおり、日本語に特徴的な授受動詞構文の意味を内部構造と相関させながら解明しようとする意欲的な研究である。形式と意味の一方に偏ることなく、これら2つの側面にバランスよく目を向けた優れた研究である。「モノ的授受」から「非モノ的授受」への連続性（言い換えれば、本動詞構文から補助動詞構文への連続性）を的確に捉え、また、そこに恩恵性がどのように関与するのかを明らかにした点は、高く評価される。近年大きな関心が寄せられている動詞の意味に対して行き届いた分析が施されている点も注目される。

動詞の語彙的特徴を押さえたうえで「モノ的授受」・「非モノ的授受」などの概念を導入することにより構文の意味を十全に把握しようとする楊玲氏のアプローチは、文法研究における重要課題である構文の意味研究に資するところ大である。構文の意味拡張などに着目する点で「動詞意味論」を超え、一方、動詞など構文の内部要素に分析のメスを入れている点で「構文文法」とも異なる、という氏独自の立場が示されている点は特筆に価する。近年活発な論議を呼んでいる文法化の研究との関連においても、本書は一つの有力な研究の方向性を提供している。

楊玲氏自身も指摘しているように、文法論と語用論の関係（構文の意味について言えば、構文の文法的意味と語用論的意味の関係）をさらに検討すること、及び、授受構文を対象とする日中対照研究を深化させることは、今後に残された重要な

研究課題である。とりわけ、日中対照研究の進展については、母語である中国語に対して鋭い言語感覚を持つ氏に大きな期待が寄せられる。日本語と中国語の対照研究が中国と日本で同時に推進されることは、中国と日本の学界にとって誠に喜ぶべきことである。

楊玲氏に初めてお会いしたのは2004年6月に私が北京日本学研究中心に出講したときのことである。そのときのご縁がもとで2005年4月から1年間氏を神戸市外国語大学にお迎えできたことは私にとって誠に幸いなことであった。学問研究に対する氏の情熱には深い感銘を受けた。本書の元になった氏の研究をめぐって種々の意見を交換できたことも貴重な機会であった。また、30年前に書いた拙論に言及していただいたことは、私の研究の大きな励みにもなった。記して深謝する次第である。

楊玲氏は日本語研究において多くの実績を積んでおられるだけでなく、日本語教育の分野でも既に注目すべき貢献をされている。本書の刊行によってその優れた研究成果を学界に示された氏の今後のさらなるご活躍をお祈りして、拙い筆を擱く。

2008年5月25日
神戸にて
益岡隆志

前 言

本书从“结构和意义”两个方面对日语授受动词句进行了系统而全面的分析研究。这一研究视角所反映的是益冈隆志从 70 年代开始构建的“动态句法论”(「動的構文論」)中关于句子意义和句子结构关系的研究立场,强调“形式和意义”的一体性与完整性(「ゲシュタルトの性質」)。

概观以往对日语授受动词句的研究,大致有以下两个特点,一是关注其形式上的特征,即三个句式(「(テ)クレル・(テ)ヤル・(テ)モラウ」)的对立并存现象,尤其关注三个句式在结构特征上的不同以及这种结构不同所表现出来的三个句式间意义上的不同。二是着眼于独立动词句(「本動詞構文」)和补助动词句(「補助動詞構文」)在结构特征上的不同以及因此所导致的意义上的差异。以宫地裕(1965)为代表的传统研究认为,独立动词句为单句结构而补助动词句具有内外双层结构(「内外二重構造」)。这一观点也奠定了传统研究中对独立动词句与补助动词句间意义关系的认定,即独立动词句表示“物的授受”,而补助动词句表示“事件的授受”、“恩惠的授受”。这也是长期以来对补助动词句意义的关注与界定集中在“恩惠义”上的重要原因。但是无论是授受动词句三个句式间的意义差异,还是广受关注的“恩惠义”都只反映授受动词句意义的一个侧面,它既不能反映出独立动词句和补助动词句间从结构到意义的关联性和连续性,更不能本质、全面而系统地反映出授受动词句的意义。

针对以往研究的问题点,本研究以本质、全面而系统地研究考察日语授受动词句的意义为目的,强调提出,在分析研究日语授受动词句三个句式之间结构和意义上的“外在关联”(「外的関連」)以前,首先必须探明授受动词句的“内在关联”(「内的関連」),即独立动词句和补助动词句之间从结构到意义上的关联性。为探

求这一“内在关联”，本研究把授受动词句的意义范畴分为“物授与”（「モノの授受」）与“非物授与”（「非モノの授受」）两个下位类型进行分析研究。

把日语授受动词句分为“物授与”与“非物授与”同时也是立足于授受动词句的本质意义特征。本书还着重强调了语言类型学中授受动词句的泛语言共性，即授受动词句最根本的意义特征在于“物的移动”（「モノの移動」），本书把它称之为“对象使役性移动”（「対象使役移動」）。立足于授受动词句的这一泛语言共性，我们同时还发现，一直以来备受关注的“话语者中心性”（「話し手中心性」）、“话语者视点”（「話し手の視点」）以及“视点”（「視点」）等体现日语授受动词句意义特性的要素，其内在本质反映的是以“话语者”的视点为中心的“物的移动”的方向性，本书把它分为两个不同的方向性，即“话语者指向性”（「話し手指向性」）和“话语者背向性”（「話し手離反性」）进行分析考察。

本书从结构上分为5章，第1章强调指出授受动词句“对象使役性移动”的泛语言共性。第2章分析并总结出日语授受动词句的“内在关联”性。通过着眼于补助动词句前项动词的语义特征得以探明，前项动词的语义特征与授受动词句的意义有着紧密关联。在补助动词句中，前项动词与补助动词的结合是一种动态的结合，两者从结构到意义相互关联并相互制约。这一动态的结合尤其体现在补助动词的动词性消失和与之相伴的语法化所带来的补助动词的功能扩展上。前项动词的语义特征与授受动词句意义的互动关系在第3章的考察中得到了更进一步的分析与阐述。第3章通过对前项动词分类分析得出结论，在从“物授与”到“非物授与”的语义扩展过程中，前项动词的语义特征起到了决定性的影响作用。前项动词与补助动词的动态结合清晰明了地反映在“物授与”与“非物授与”的“事件语义结构”（「事象構造」）中。但是另一方面，“动态句法论”和以谓语动词为中心的“动词语义论”（「動詞意味論」，（以影山太郎 1996 的「動詞意味論」为代表）和以句子为语义单位，强调句子整体含义的“句法论”（「構文

論」，以Goldberg1995的『構文論』为代表）不同，其特点在于并强调谓语动词与句子整体含义，同时不忽略句子各构成要素的作用。本书在第1章及第3章中分别就“对象使役性移动”中重要构成要素的“对象”即“授与物”进行了分析研究，并在第4章中就“授与者”与“接受者”，以及“授益者”与“受益者”等语义论元的格标记进行了分析研究。分析表明，在表示“物授与”的(テ)モラウ句和(テ)ヤル・(テ)クレル句中，前者的カラ格和后者的ニ格，一为起点一为终点，二者既是表示“物授与”的语法性标记，也是授受动词句表示“物授与”最基本的结构标记。可以说确保其一也是(テ)モラウ句和(テ)ヤル・(テ)クレル句表示“物授与”的一种句式结构上的义务。也正是通过这一分析得以表明，出现在授受动词句中的二格和ノタメニ格这样的“格标识”（「格標識」），尽管它们可以通过“格”来表示接受者和受益者，但它们并不是授受行为真正的语法性标识，而授受（补助）动词在授受动词句中才是始终具有标示出接受者和受益者功能并具有明确人称性的语法性标识。本书在第5章中就授受动词句的恩惠义进行了阐述，结论为，恩惠义与非恩惠义之间并非相互独立互不关联，二者呈关联并连续的关系。同时这种相互关联源自于授受动词句的句子结构。这一点从「(テ)クレル・(テ)ヤル・(テ)モラウ」三个句式所表现出来的特殊语义特征，例如(テ)クレル句所表现出来的“主观评价性”，(テ)ヤル句所表现出来的“意志性”，(テ)モラウ句所表现出来的“潜在使役性”都能得以证明。

目 次

目 次

序 一	1
序 二	5
前 言	1
序 章	1
1. 問題の所在	1
2. 本研究の考察対象	3
3. 先行研究	7
3. 1. 構文的特徴に関する研究	7
3. 2. 意味的特徴に関する研究	11
3. 3. その他の観点からの研究	14
4. 残されている課題と本研究の立場	15
4. 1. 残されている課題	15
4. 2. 本研究の立場	18
4. 3. 研究理論と方法	19
5. 本研究の構成	21
6. データや記号の扱い方について	24
6. 1. データについて	24
6. 2. 記号について	25
第1章 授受動詞構文の本質的意味特徴	26
1. はじめに	26
2. 授受動詞構文の本質的意味特徴	27
2. 1. 授受動詞構文3系列の対立と共存	27
2. 2. 関連する先行研究	28
2. 3. 授受動詞構文の〈話し手関与性〉	31
2. 4. 「クレル・ヤル・モラウ」の三項対立と「イク・クル」の	

二項対立視点	33
2. 5. <話し手指向性>と<話し手離反性>	37
2. 6. 授受動詞構文の本質的意味特徴	38
3. 本動詞構文に内包される恩恵性	42
3. 1. 通時的用法から見る「モノ」の意味特徴	45
3. 2. 共時的用法から見る「モノ」の意味特徴	52
3. 3. 好ましいモノから「恩恵性の萌芽」へ	74
4. まとめ	76
4. 1. 日本語授受動詞構文の意味特徴についての再認識	76
4. 2. 構文と意味の相関関係を求めて	78
第2章 「モノ的授受」から「非モノ的授受」への拡張	81
1. 関連する先行研究	81
1. 1. 本動詞構文と補助動詞構文との構文関係	81
1. 2. 構文的関連性から意味的関連性へ	83
2. 授受補助動詞構文の「内的関連」を求めて	86
2. 1. 授受補助動詞構文の多義性	87
2. 2. 「モノ的授受」と「非モノ的授受」	89
2. 3. 直接ベネファクティブ構文と間接ベネファクティブ構文	91
3. 「モノ的授受」から「非モノ的授受」へ	95
3. 1. 本動詞構文が表す「モノ的授受」	96
3. 2. 補助動詞構文が表す「モノ的授受」	100
3. 3. 補助動詞構文が表す「非モノ的授受」	118
4. 授受動詞構文の「内的関連」——「モノ的授受」から「非モノ的授受」へ	132
第3章 動詞の意味と構文の意味	137
1. はじめに	137
2. 関連する先行研究	138

3. 「モノ的授受」を表す動詞の語彙的意味制約	141
3.1. 授与目標の二格生起の確認	141
3.2. 「モノ的存在」の再考	143
3.3. 「モノ的存在」の更なる意味	148
3.4. 動詞の意味と「モノ的授受」を表す構文の意味	151
4. 「モノ的授受」を表す事象構造の提案	155
4.1. 「モノの同定」と「授与目標の同定」	155
4.2. 授受動詞構文における定項(Constant)の存在	156
4.3. 「モノ的授受」を表す授受構文の事象構造	159
4.4. テモラウ構文が表す「モノ的授受」の事象構造	163
5. 「非モノ的授受」を表す動詞の語彙的意味制約	168
5.1. 「非モノ的授受」を表す他動詞	169
5.2. 「非モノ的授受」を表す自動詞	181
6. 「非モノ的授受」の事象構造の提案	193
6.1. 3系列構文が表す「非モノ的授受」の事象構造	193
6.2. テクレル・テモラウ構文の「非モノ的授受」の事象構造	195
6.3. テヤル構文の「非モノ的授受」事象構造	197
6.4. まとめ	199

第4章 名詞句の格表示と授受動詞構文の意味	201
1. はじめに	201
2. テモラウ構文授与目標の格表示から見る授受動詞構文の意味	202
2.1. 二格授与目標の不顕現	202
2.2. 受益者と授与目標の「一格二役」からの分裂	203
2.3. 視点融合の段階性と「モノ的授受・非モノ的授受」の境界線	206
2.4. 授与目標の格表示から見る代行政為	210
2.5. 森田(2002)の「代行」について	213

3. テモラウ構文におけるカラ格とニ格の授与者格表示	217
3. 1. 本動詞構文における授与者格表示	218
3. 2. 補助動詞構文における授与者格表示	228
3. 3. テモラウ構文授与者の「一役二格」の対立相補	237
4. テクレル・テヤル構文の受益者格表示	238
4. 1. 受益者の格表示について	238
4. 2. 受益者の格表示と受益者マーカ	241
4. 3. 受益者と授益者マーカ機能	248
5. まとめ	253
第5章 授受動詞構文の恩恵性	256
1. はじめに	256
2. 関連する先行研究	257
2. 1. 補助動詞が表す「利益態」	257
2. 2. 補助動詞が表す「方向性」	258
2. 3. 恩恵・非恩恵の関係について	262
2. 4. 本研究の立場	265
3. テクレル構文の恩恵性	266
3. 1. テクレルの構文的特徴から意味的特徴へ	266
3. 2. 恩恵性から見るテクレル構文の意味	269
3. 3. テクレル構文における恩恵・非恩恵の関連性	270
4. テヤル構文の恩恵性	274
4. 1. テヤルの構文的特徴から意味的特徴へ	274
4. 2. テヤル構文が表す意志性	277
4. 3. テヤル構文における恩恵・非恩恵の関連性	281
5. テモラウ構文の恩恵性	284
5. 1. テモラウの構文的特徴から意味的特徴へ	284
5. 2. 働きかけ性・恩恵性から見るテモラウ構文	288
5. 3. テモラウ構文の恩恵・非恩恵の関連性	298
6. まとめ	302

終章	305
1. 「形式と意味」から見る授受動詞の構文と意味	305
2. 本研究によって明らかにされたもの	309
3. 今後の課題	315
3. 1. 本研究において残されている課題	315
3. 2. 対照研究に向けて	316
参考文献	322
后 記	333

序 章

1. 問題の所在

中国語を母語とする日本語学習者や日本語教育者は日本語の授受表現について、少なくとも次の二つの問題に関心を抱かせられる。

- ① 「物の授受」事象に対して、例えば例(1)の「次郎が太郎に切手を与えた」と、例(2)の「次郎が太郎に切手を売った」という事態を、日本語では述語の選択によって、三つの異なる形式で表現することができるのに対して、中国語では通常一つの述語“给”を用いて表現する。

(1) a 次郎が太郎に切手をくれた。 /次郎给了太郎一枚邮票。

b 次郎が太郎に切手をやった。 /次郎给了太郎一枚邮票。

c 太郎が次郎に切手をもらった。

/太郎得到次郎给的邮票 (太郎要了次郎一枚邮票)。

(2) a 次郎が太郎に珍しい切手を売ってくれた。

/次郎卖给了太郎一枚稀有の邮票。

b 次郎が太郎に珍しい切手を売ってやった。

/次郎卖给了太郎一枚稀有の邮票。

c 太郎が次郎に珍しい切手を売ってもらった。

/太郎让次郎把一枚稀有の邮票卖给了他 (次郎把一枚稀有の邮票卖给了太郎)。¹

- ② このように、中国語と日本語とは、構文上アンバランスの対応関係ではあるものの、例(3)～(6)に示すように、意味的には然るべき対応関係を見てとることができる。

(3) a 次郎给了太郎一枚邮票。

- a' { 次郎が太郎に切手をくれた。
次郎が太郎に切手をやった。
太郎が次郎に切手をもらった。

- (4) a 次郎売給了太郎一枚稀有的の邮票。

- a' { 次郎が太郎に珍しい切手を売ってくれた。
次郎が太郎に珍しい切手を売ってやった。
太郎が次郎に珍しい切手を売ってもらった。

- (5) a 次郎为(给)太郎搜集到了一枚稀有的の邮票。

- a' { 次郎が太郎のために (に) 珍しい切手を見つけてくれた。
次郎が太郎のために (に) 珍しい切手を見つけてやった。
太郎が次郎に珍しい切手を見つけてもらった。

- (6) a 次郎登(手不方便的) 太郎贴上了邮票。

- a' { 次郎が(手の不自由な) 太郎のために切手を貼ってくれた。
次郎が(手の不自由な) 太郎のために切手を貼ってやった。
(手の不自由な) 太郎が次郎に切手を貼ってもらった。

例(3)～(6)から明らかであるように、中国語と日本語は、まず構文形式の上では、一対三の対応可能性を有している。一方、意味的対応関係から見ても、基本的に中国語では“给”を用いた構文で対応できる。しかし、このような対応可能性は例(3)～(5)には見られるものの、例(6)には見られない。この言語事実は、両言語の授受動詞構文における構文と意味の対応の限界性を示唆している。

このように、①からは両言語における授受動詞構文の体系上の相違が、②からは両言語の授受動詞構文の意味的対応性、とりわけその対応のズレ、ないしはある種の限界性の示唆されていることを見てとることができる。特に②の意味的対応